

現代ノルウェー語における動詞結合価について

鴨 瀬 昌 幸

0. はじめに

結合価（化学から借用した概念である）の研究は、1950年代のTesnièreに端を発している。1960年代以降、この問題について集中的に研究したのは東ドイツのHelbigであり、わが国にもその成果が伝わってきている（注1）。ノルウェー語に結合価理論を適用した研究としては、Bruaas (1975)とTorp (1975)がある。この2編の論文は、いずれも動詞の結合価についてのみ扱っている。但し、両者の研究態度や方法はかなり異なっているが、ここでは詳述しないことにする。

小論の目的は、ノルウェー語の動詞結合価を研究するにあたって、その出発点を確認することである。まず、結合価理論の輪郭及び注目すべき点を、伝統文法の考え方と対照させながら述べる。次に、ノルウェー語のように、格体系を語順で表現する、いわゆる「位置言語」——ドイツ語のように格体系を語形変化によって表現する「格言語」ではなく——の動詞結合価を研究する際に生ずる問題について少し触れる。勿論、スペースの関係上、議論を尽くす訳にはいかないので、その後に動詞（定動詞）の表層構造における結合価を記述する際の問題について検討を加える。

1. 結合価と伝統文法での概念との比較

まず、ここで伝統文法と結合価の概念を比較して、注意すべき点をいくつか述べることにする。まず、下記の例文を見ることにしよう。これらの例文はTorp(1975)による。但し、グロス及び日本語訳は、小論を通じて筆者が付したものである。

1. ho sov
she sleeps 「彼女は眠る／眠っている」
2. dei saknar heimen
they want house-the 「彼らは家を欲しがっている」

3. han bur heime

he stays home

「彼は家にいる」

4. han gjev henne ein ring

he gives her a ring

「彼は彼女に一個の指輪を与える」

例文1.についてみると、伝統文法では、sove (søveの原形)は完全自動詞であって、主語と述語動詞だけで文が完結しているとする。同様に、例文2.ではsakneが完全他動詞であるので、述部に目的語(注3)を必要とし、ここではheimenが目的語となっている。例文3.ではbuが自動詞であるが述部に副詞的修飾語句を必要とし、ここではheimeがその役をになっている。さらに、例文4.では動詞gjeが授与動詞であるので、述部に間接目的語henneに加えて直接目的語ein ringをとっているとする。

一方、(従来の)結合価理論では、例文1.では動詞soveは結合価1を持つ動詞であり、「項」(文肢)として主語をとるとする。同様に、動詞sakneは結合価2を持ち、主語と目的語をとる。buも結合価2を持つが、主語と、場所を表す副詞的語句をとる。動詞gjeveは結合価3を持っていて、主語、直接目的語、間接目的語をとるとする。

ここで注目しなければならないのは、結合価理論では、文の構成要素として、名詞句や(補語となる)形容詞と、伝統文法では時や場所を表す副詞的修飾語句とされてきたものとを同列に扱っていることである。つまり、そのような副詞的語句も文を構成するのに必要な要素(文肢)とみなすのである。

この結合価理論において、伝統文法に対して最も挑戦的な点は、「それが一方において(節の)主語と述語の伝統的区別、他方において(動詞の)主語と目的語の伝統的区別を、いわば格下げした点にある」(注2)。つまり、文において核となるのは主語と述語の組ではなくて、動詞だとみなす訳である。この考え方は、英語や他の西欧の諸言語のみを研究対象にする訳ではない言語学者にとってかなり有効な考え方であろう。

2. 他動詞と結合価理論

ノルウェー語の伝統文法では、spise(英eat)及びbesøke(英visit)を他動詞とみなしている。さて、spiseについては、次のような3通りの表現が可能である。尚、例文5.から10.まではBruaas(1975)による。

5. jeg spiser frokost

I eat breakfast

「私は朝食を食べる」

6. jeg spiser

I eat

「私は食べる」

7. jeg spiser bare to ganger om dagen

I eat only two times in day-the

「私は一日2食しか食べない」

ところが, besøke (英visit)は上記の例文6. や7. のように用いることはできない。即ち,

8. jeg besøker mine venner

I visit my friend

「私は友人を訪問する」

ということはあるが,

9. *jeg besøker

I visit

「私は訪問する」

10. *jeg besøker bare få ganger i året

I visit only few times in year-the

「私は年にほんの数回だけ訪問する」

という表現は非文となる。

つまり, 同じ他動詞であっても, spiseは実在していない(伝統文法では省略されていると考えざるを得ない)目的語をとることができる, 即ちいわばゼロ目的語をとることができる。これに対して, besøkeは, ゼロ目的語をとることができない。これまでの(少なくともノルウェー語の)伝統文法では, 他動詞間のこの区別はなされていない。だが, 結合価理論では, 'selvstendig' : 'uselvstendig' (英independent : dependent) という概念を使って峻別する。spise は selvstendigな動詞であるが, besøkeはuselvstendigだとするのである。

3. 結合価理論をノルウェー語に適用する際の問題点

Bruaas (1975)は, 概略次のようなことを述べている。ドイツ語のような格言語とノルウェー語のような位置言語(そして格が失われた言語)との間には, 結合価の記録に関して顕著な相違点がある。格言語では, 結合価の担い手として特定化されるのは述語動詞によって制御された格であるが, 位置言語では述語動詞によって制御された文肢である, と。

つまり、ノルウェー語の場合、まず文肢についてその種類や性質を定めなければならない訳である。

これまで、文肢――文の構成要素――に触れる際、何の断わりもなく主語、目的語、副詞的語句等と書いてきたが、実はこれらはその統語的性質に着目して文肢を分類し、各々に命名したものである。しかし、ノルウェー語のような位置言語では、文肢の表層構造における統語的性質が、ドイツ語のような格言語ほど顕在化していないので、別の観点から文肢を分類することが必要になる。

この場合、文肢の意味に着目した分類をすることが有効であると考えられる。また、このような考え方に基づいた具体的な研究成果――ノルウェー語ではなく、日本語を研究対象にしている――も世に送りだされている。その優れた例として、小泉保他(1989)を挙げることができる。この辞典のxxi頁には、文肢の主要成分である名詞の意味特性の一覧が載っている。このような記述を参考にしながら、ノルウェー語における結合価の研究を進めていきたいと思う。尚、Bruaas(1975)やTorp(1975)には、このような記述は見られない。

4. 非人称動詞の結合価

Torp(1975)をはじめ、これまでの結合価理論では、下記の例文11.に見られるような、いわゆる非人称動詞を0価の結合価を持つとする議論がみられる。

11. det snør

it snows

「雪が降る／降っている」

だが、私見によれば、これは表層構造と意味内容を混同した誤りである。なぜなら、彼らの議論では、他の動詞については表層構造に着目して議論を進めておきながら、非人称動詞に限って深層構造を持ち出しているからである。これらの動詞は深層構造ではともかく、表層構造では紛れもなく1価の結合価を持つ動詞である。0価の結合価を持つ動詞とは、例えばラテン語等に見られるように、動詞一語だけで文が完結しているような場合についてのみ適用できる概念である。

5. 動詞結合価の記述について

Torp(1975)に、動詞結合価の記述の例が挙げられている。それによると、上記の例文1.から4.までの中に出現した動詞sove, sakne, bu, gjeは次のように記述できる。

sove

a. (結合価) 1

b. (統語範疇と機能) 名詞類―主語

- c. (意味内容) 生存している生物

sakne

- a. 1
- b. 名詞類－主語 + 名詞類－直接目的語
- c. 人間 + (選択) 制限なし

bu

- a. 2
- b. 名詞類－主語 + 副詞的語句
- c. 生存している生物 + 場所あるいは様態

gje

- a. 3
- b. 名詞類－主語 + 名詞類－間接目的語 + 名詞類－直接目的語
- c. 生存している生物 + 生存している生物 + (選択) 制限なし

最低限必要な情報は押えてあるが、小泉他(1989)の記述と比べてみると、意味内容の項をもう少し精密化する必要があると思われる。また、通例、あるひとつの動詞に対して意味は複数存在する。従って、場合によっては各々の意味ごとに結合価、統語範疇と機能を記述すべきであろう。

6. おわりに

以上、ノルウェー語における動詞結合価理論を研究する際の問題点について述べてきた。紙数の都合上、結合価理論をめぐる全ての問題に触れることができなかった。それどころか、多くの重要な問題についても、小論では触れなかったものが多い――例えば、ある文肢が義務的なものか、それとも随意的なものか、等――。これらの問題については今後研究を重ねることにしたい。また、他の北ゲルマン諸語についても同様の研究を進めることによって結合価理論の深化を目指すことにしたい。

注

(注1.) 例えば, Helbig, G. und W. Schenkel(1978): Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben. Leipzig. 等を参照.

(注2.) Lyons(1981)による.

(注3.) 但し, ヨーロッパ大陸の伝統文法では, 動詞の目的語や補語, それに副詞的修飾語句までも補(足)語(独Ergänzung; / komplement)と呼んでいる. スカンディナヴィア半島の諸言語における伝統文法も, この大陸式の述語の用い方をしている. これらの用語については, Bruaas(1975) p. 24で整理がなされている.

参考文献

Bruaas, Einar(1975): Om verbalvalens: En skisse, Norskrift 4, 20-51.

Drosdowski, Günter(1984): Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, 4., völlig neu bearb. u. erw. Aufl., Mannheim, Bibliographisches Institut.

Lyons, John(1981): Language and Linguistics: An Introduction, Cambridge, Cambridge University Press.

Tesnière, Lucien(1959): Éléments de syntaxe structurale, Paris, Klincksieck.

Torp, Arne(1975): Ei lita utgreiing om verbalvalens: Kva er verbalvalens?, Norskrift 4, 52-59.

小泉保他(1989): 『日本語基本動詞用法辞典』東京, 大修館書店.

チャールズ J. フィルモア(田中春美・船城道雄訳)(1975): 『格文法の原理—言語の意味と構造—』東京, 三省堂.

前島儀一郎(1989): 『英独仏語・古典語比較文法』東京, 大学書林.